

「私とジェンダー」をテーマに  
毎回様々な切り口でコラムを  
掲載しています。

# ジェンダーと私



たちばな・はつみ

元 滋賀県近江八幡市職員  
女性会議はちまん会員

NPO法人 SEAN  
教育部門G-Free スタッフ  
立花 初美

昭和25年生まれの私は、いよいよ還暦を迎えることになりました。「えーもう60年も生きてきたんだー」と時の過ぎる速さに少々驚いている自分です。

戦後まだまだ混乱した社会状況の中で生を受けた私は、いわゆる団塊の世代に属し何時も大勢の中でもがきつつ、常に目立たないように消極的に年を重ねてきたように思います。

大正生まれの母は典型的な良妻賢母型、父は：はてどうだったかな？真面目で口数が少なく：（早くに父とは死別しているため記憶に乏しい）。こんな両親のもとで育った私は、何の疑いもなくジェンダーの枠組みにしっかりとらわれて成長してきたように思います。ただ、母子家庭を支えてきた母は、芯が強く気丈な努力家で、一人の女性として見ればロールモデルとして私にとっては影響力のある存在でもありません。

## 男性社会そのものの職場

3年前に退職しましたが、私が公務員として市役所に入庁したのは昭和47年、今から38年前になります。

その頃は、高度成長期に入ろうとする時期で、男性は仕事、女性は家事育児という考え方が一般的であり、結婚退職は当たり前、女性が働くのは「結婚前の腰掛け」という考え方を男性はもちろんのこと、女性も受け入れていました。私も最初からずっと働き続けようと考えていたわけでも特になく、いいかげんに成り行き任せだったように思います。

その頃の職場は、正に男性社会そのものでした。職員全体に占める女性の割合も現在から比べると格段に少なく、仕事の担当も内容によって男性、女性の職域分野がはっきり分かれていて、業務は男性から男性へ、女性から女性へと引き継がれていたのです。

女性職員には「職場の花」として気配り、優しさなどが要求され、それに応えることが有能な女性との見方があったように思います。

私が子育てに奮闘していた頃は、今のように育児休暇もなく、家事一切は女性の仕事であり、その上に職場での職務の遂行や責任も要求され、肉体的疲労は相当なものだったのですが、幸か不幸かその頃は現在のように女性登用という状況がな

かったため、何とか仕事と家事を両立させてこられたんだと思っています。

## 仕事で出会った

### 「ジェンダー」

昭和から平成へ元号が変わるころ、「女性差別撤廃条約」が締結され、日本各地域で当時は「婦人問題」といわれた女性の人権についての啓発や取り組みがスタートしていた時期に、社会教育課で女性教育を担当することになりました。その頃の私は全くの無知で、担当して初めて女性の人権問題がクローズアップされていることを知ったような状態でした。とにもかくにもまず自分が学ばなければと、当時市内に誘致されたピカピカの「婦人センター」（現在は男女共同参画センター）へ足しげく通うことになりました。

あらゆる講座に顔を出し、国内研修にまで参加することとなりましたが、女性の人権問題に熱心に取り組んでいる方々との出会いが、私にとっては大きなカルチャーショックでした。当時は「ジェンダー」という言葉はまだ使われていなかったのですが、仕事を通してジェンダー